

上田友がの 表紙イラスト：ホ屯

トリーニョ NEXT

2D FIGHTER DREAMIN NEXT



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『二次元ファイタードリーミンNEXT』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



三次元ファイター
★☆☆
2D FIGHTER DREAMIN NEXT
トリーミンNEXT

上田ながの
表紙／ねむ

登場人物紹介

Characters

にじの ゆめこ
虹野夢子

二次元ドリーム文庫を愛読している女の子。陵辱は嫌いで、「二次元ファイタードリーミン」に変身して、二次元ドリームノベルズのヒロインを救うために本の世界に入り込む。

くろはねあかね
黒羽紅音

『淫辱の魔法捜査官 羞恥陵辱 24 時』のヒロイン。四十八曲署で魔法捜査課の課長を務めている。見た目は子供、頭脳は大人なロリババ。

二次元ファイターブラックドリーム

夢子とは違う、もう一人の二次元ファイター。突如ドリーミンの前に現れ、邪魔をする彼女の目的とは……!?

「許せない。これは……絶対に許せないよ」

肩の辺りで切り揃えた茶色がかつた髪が揺れる。クリクリと丸く、吸い込まれそうな程に澄んだ瞳が、怒りでつり上がっていた。それ程大きくない胸と、あまり絞り込まれていない括れを持った「女の子」が、怒りに燃えている。

彼女の名は虹野夢子。ラブラブエッチを愛する純真無垢な少女である。

今回彼女が怒っている原因の一冊は『淫辱の魔法捜査官 羞恥陵辱24時』だ。

夢子がこの本を買った理由は、買おうと思っていた栗栖くりすティナ先生作の『仰せのままにお嬢さま！』が、売り切れてしまっていた為である。そこで仕方なく手に取ったのがこの『淫辱の魔法捜査官 羞恥陵辱24時』だったというわけである。

(いくらドリームノベルズだといって、そんなに陵辱ばかりの筈がない。タイトルに陵辱とかついているのは、きつと読者を釣る為だ)

だが、その考えは甘かった。

前回の『監獄島の洗脳捜査官 麗しき淫肉奴隷』と同様に、今回もその内容は陵辱ばかりであったのである。

魔法捜査官の内容を簡単に説明するとうだ。

街で連続して女性が襲われる事件が発生。その事件の裏には魔法が関わっており、魔法を使った犯罪を捜査する魔法捜査課——通称魔捜が動き出す。が、捜査員達は敵の罠にか

かり、一人また一人と陵辱されていってしまふ……というものである。

「まったく酷いことこの上ない」

夢子はグツと拳を握りながら、一人呟いた。

（二次元ドリムノベルズって、もしかして本当にこんなのかな？ それとも、この作者の『上田^{うえだ}ながの』って奴の趣味？）

それはまだ夢子には分からない。

というわけで、二次元ドリムノベルズをみんなで購入って、本当にそんな内容ばかりなのか夢子に代わってチェックしてみましよう。特に前回、今回と立て続けに夢子を買ってしまった上田ながの作品は要チェックですぜ。

出ている本の数は監獄島、魔法捜査官を含めて2010年2月16日時点（何でこの日付なのかは、色々推理してみましよう）で全七冊。先の二冊の他に『隸辱の騎士ルリア 墮悦の盟約』『淫妖蟲外伝〜九重京子退魔録〜』『戦姫武者九流凰花』『蒼き女海賊ノア 海賊団陵辱航海』『欲獣狩り村雨静』が発売中です。

（まあそのチェックは今度でいいよね。取り敢えず今は魔法捜査官が先決だ）

何としてでもこの本の中で陵辱されているヒロイン達を救わなければならぬ。作者に手紙を出して抗議するという手もあるが、それでは一度出ってしまった本は救えない。

ならばやることは一つだ。

「神様。私に力をちょうだい。みんなを救いたいんだ。だから——」
夢子は右腕を天高く突き上げると、瞳を閉じ、意識を集中させる。力の奔流が、少女の身体を包み込む。

「ドリームチェンジ!!」

そして少女は変身ワードを紡いだ。

刹那——夢子の小柄な肉体が輝きを放つ。光の中で少女の身体は宙に浮いた。同時に身に着けていた制服が光の粒子に変換されていく。上下セット四百円の下着も同様であり、白い裸身が剥き出しとなる。肌理の細かい白い肌に、小さいけれど美しい形を保った乳房が、プルツと揺れた。毛も生え揃っていない秘裂までが晒される。

しかし、それは一瞬のこと。次の瞬間には光の粒子が新たな衣装を構成していく。身を包むは燃える様な朱を基調としたボディースーツ。胸元に添えられた大きなリボンが特徴的だ。秘裂を隠すのは白いレースの下着。同時にフリル付きの赤いスカートが構成され、腰回りを隠す。足を白いニーソックスが包み込む。スカートとニーソックスの間に作り上げられる白い絶対領域が艶めかしい。

更に靴まで作り上げられる。衣装と同じ赤い靴。踵部分にあしらわれた羽を思い浮かべせる装飾が可愛らしい。同時に手を赤い手袋が隠す。

そして最後に構成されたのは、左右の耳元からアンテナのようなものを伸ばすバイザー

だった。その姿はまるで戦う変身ヒロインの様である

ここまでの変身プロセス文章は前回とまるで同じだ。変身バンクという奴である。

「二次元ファイタードリーミンツ!!」

変身完了と同時に、夢子はビシッとポーズを取って名を名乗った。別に誰かが見ているわけではないけれど、ここまでやらなければ変身ヒロインとはいえないのです。

「よしっ！ 変身はうまくいった。あとは……みんなを助けるだけだね。そう、大丈夫。今度こそ大丈夫なんだから！ 絶対に!!」

不安を掻き消す様に、何度も自分に言い聞かせる。その理由は、前回の失敗にあった。前回、夢子はヒロイン達を救うどころか、逆に彼女達と一緒に陵辱されてしまっているのである。当然、その傷は夢子の心に今も深く刻まれている。

だが、だからといってここで引くわけにはいかない。逃げ出したい、所詮本なんだから無視したっていいという気持ち以上に、ヒロイン達を救いたいという感情の方が強かった。まさに二次元ヒロインの鑑の様な人間である。

グッと夢子は赤い手袋に包まれた拳を握った。

（行くよ！ 二次元世界の平穏は、私が救う!!）

掌を魔法捜査官の表紙に乗せる。そして――。

「ドリームダイブツ!!」

ドリーミンは二次元ファイター最大の能力を発動した。

真紅の戦士二次元ファイタードリーミンの肉体が輝きに包まれる。少女の肢体すべてが光の粒子へと還元され、本の中へと吸い込まれていった。

これこそが二次元ファイターの真骨頂。その名の通り二次元戦士として、ありとあらゆる二次元世界に突入することができるのである。まさに夢の能力だ。

さあゆけ二次元ファイタードリーミン。二次元世界に介入せよっ！

*

「ここが魔法捜査官の世界か」

夢子の瞳に映り込んだのは見慣れた自分の部屋ではなく、多くの人々でごった返す街の風景だった。

「ここでは私も魔捜の人間というわけか」

位置の確認の後、自分の服装チェックも行う。二次元ファイターの変身は解けており、代わりに見慣れない制服を夢子は身に着けていた。濃紺のスーツの下に白いワイシャツ、青いネクタイという出立ち。結構可愛い。

（この格好なら案外早く魔捜のみんなに接触できるかも。今回はうまくいきそうな気がするわ）

二次元ファイターの能力の一つに、介入した世界のことを一瞬で理解できるというもの

ースのショーツに粘液が染み込んでくる。甘く痺れる様な感覚が下腹部に走った。ピクンッピクンッと電流でも流されたかの様に全身が震える。

「く、くそっ！ こんなので、こんなのでやられるもんかあっ！」

陰部に愛撫を受けるたび、夢子の肉体は熱く火照っていく。だが、だからといって二次元戦士は諦めない。必死に身をよじり、何とか触手の拘束から逃れようとした。

「逃がしはせんよ」

しかし、紅音はそれを見逃してくれない。もがくドリーミンを嘲笑う様にパチンツと指を鳴らした。

するとそれに呼応する様に触手が更なる動きを加えてくる。腕に絡みついていた肉触手が、二の腕から脇にまで伸びてきたかと思うと、ドリーミンの戦闘衣装の中に先端部を潜り込ませてきた。

両脇から鎖骨、胸元を肉茎がなぞっていく。

「んくっ！ き、気持ち悪い。ぐちゃぐちゃして、私が汚れちゃうよお！」

内部で蠢く異生物によって、衣装に皺が寄る。粘液が内側から染み込んでいくのが分かった。そんな触手の体液によって、真紅のドレスが溶けていく。鎖骨から胸元にかけてが露わになっていった。白い肌に、あまり着けておく必要性を感じさせないレースのブラが晒される。粘液によってドロドロに穢された肌が、日の光を反射して妖しく輝いた。



「み、みないでっ！ みないでよおっ！」

紅音やブラックドリームの視線を感じる。いや、それだけじゃない。この光景は街の人々にまで視姦されていた。

「隠す必要はない。可愛い乳房ではないか。私など好感さえ覚えるぞ」

「そうだな。やつぱり胸は慎ましやかな方がいい」

悲鳴の様な訴えをするドリーミンに紅音とブラックドリーム——二人の貧乳少女がうんうんと優しく微笑みながら首を縦に振った。

「可愛い乳房を隠しておくなど勿体ない。もつと多くの人に見てもらえ」

正気を失った紅音が、再び肉触手に指示を下す。途端に触手が下着に絡んできたかと思うと、あっさりとそれを引き千切ってきた。

「いやああああああっ！」

小さいけれど形のいい美乳がプルンツと顔を覗かせる。白く小振りな胸と、桜色の乳房が見事なまでに調和した美しい乳房だった。

「おおおっ！」

この光景に、今まで周囲で見守るだけだったギャラリー達からも歓声上がる。

（い、いやっ！ 見られてる。私のおっぱい見られちゃってるよお）

突き刺さる様な視線を感じた。見られていると感じるだけで、ドクドクと鼓動が高まっ

ていく。羞恥のあまりに火照り出す肉体。ジワリッと甘い匂いを含んだ汗が分泌され、胸が描く曲線をなぞる様に垂れ流れていった。

「おやおや。もしかして見られて感じているのかな？ だとしたらドリーミン。君はとんでもない淫乱だな」

「ち、ちが——私は感じてなんか……」

ブラックドリームの嘲笑う様な言葉を耳にし、ドリーミンは必死に首を横に振った。

「ふうん、感じてないねえ……。嘘はやめた方がいいよ。ねえ紅音さん」

「……まったくだ。マ○コをそこまで濡らしておいて、よく言う」

正気のない紅音はとんでもない単語までさらりと言つてのける。と同時に、触手を使ってスカートまで捲り上げてきた。

ぐしよぐしよに濡れたショーツまでが、人々に見られてしまう。

「こ、これは濡れてるんじゃないっ！ し、触手の体液で……」

必死だった。濡れている筈などない。こんな状況は気持ちが悪いだけだ。

「濡れておらんか……。では調べさせてもらおうかのう。もし嘘をついていたら、お仕置きじゃ」

グジュリッと触手がうねる。肉触手がショーツを引っ張り出した。レースの下着が痛々しい程に伸ばされていく。

「やっ、そ、それだけは、こんなところでそれだけはやめてえっ!!」

(見られちゃう。私の恥ずかしいところがみんなに見られちゃうよお!)

秘部をこんな街中で晒されるなど、考えるだに恐ろしい。ドリーミンは紅音に対して必死に制止の声を上げた。しかし、今の紅音に夢子の言葉は届かない。触手は動きを止めることなく、ビリビリッとショーツを破り去ってしまった。

「やだっ! こんなやだよおっ!」

ほとんど陰毛の生えていない幼い陰部がさらけ出される。少女の秘部は下着の上から散々に剥かれた為か、すっかり花開いてしまっていた。秘裂が左右に開き、ピンク色の媚肉が覗き見えている。呼吸する様に肉襞が蠢いているのが見て取れた。その表面は湿り気を帯び、妖しく輝いて見える。

「やっぱり濡れておるのう」

「ち、違うっ! これは、これは私じゃない!」

「いゝや、これは間違いなくお主の愛液じゃ。ほら、その証拠に……」

くちゅっ!

紅音が指を伸ばしてくる。彼女の細指が肉襞に触れた。伝わってくる体温。思わず夢子は「ひんっ」と声を上げてしまう。そのまま紅音は指で肉襞を撫で始める。本当に優しい手つきで、襞の一枚一枚を指でなぞる。魔法捜査官の指が蠢くたび、電流の様な肉悦がド

リーミンの肉体を襲った。

「んくっ……く、んんん……あつ、んあつあつ……」

どうしても声が漏れてしまう。

(やだ、エッチな声だ。こんなエッチな声を出しちゃってるよ……)

自分が酷く情けなかった。

じゅくりっ……。

やがて紅音の指が離れていく。魔法捜査官の細指と、ドリーミンの陰部の間に半透明の糸が伸びた。

「やはり濡れておるではないか。嘘をつくのはいかんと思うぞ。これはやはりお仕置きを与えないとならん」

「それは、あ、紅音さんが触ったからで。も、元々濡れてなんていません!!」

お仕置きという言葉に恐怖を覚え、必死に言い訳を口にする。だが、聞き入れてなどもらえない。

肌の上を這い回っていた触手の先端部が花卉の様に開いたかと思うと、ブジュリツと夢子の小さな両乳房に喰らいついてきた。

「んんっ! くあつ! な、なにっ? あ、あつあつ!! なん、か、は、はいつてくつる! ひっひんんんっ!」

チクリッと小さな針が刺さる様な感覚が胸を襲う。それと共に何か乳房の中に流し込まれた。

「なにを、い、れたんですっか？ んっんっ！ 胸、私のお、っぱいが、あ、熱い！ 凄くおっぱいが熱いっ！」

燃える様に乳房が熱く火照り出す。胸先がジンジンと痺れ、桜色の乳首が勃起していった。変化はそれだけでは終わらない。まるで空気を入れられた風船の様に、ドリーミンの胸が膨張を始めた。

「大きくなってる。私のおっぱい、ふ、膨らんでるうっ！」

貧乳が見る間に巨乳へと変化していく。大きな胸に憧れを持っていたけれど、正直恐ろしい光景だった。

「ほう、でかくなるものだのう。羨ましい……。だが、分かってるな？ これはあくまでもお仕置き。巨乳になったからといって喜んでばかりいられる様なものでもない……。苦しみが始まるのは寧ろここからだ」

ゆっくりと紅音が手を伸ばし、膨らんだ乳房に手を添えてくる。彼女の体温が乳房に伝わってきた。その温かみだけで「ふっ……うんっ！」とドリーミンは声を漏らしてしまう。そんなこちらの反応を見ながら「そろそろか」と紅音が呟いた。

「そろそろって、な、にが……くっ！ うあっ！ あっあっあっ！ な、なにこつれ、く、

苦しい。胸が、おっぱいが苦しいよおっ！」

変化が起きる。膨れ上がった胸に、内側から圧迫する様な刺激がかかり始めた。乳房が張る。胸が破裂してしまうのではないかと思ってしまう程の圧迫感だった。

「苦しかろう。そのまま胸を放っておけば、あつという間にお主の身体は破裂してしまうぞ。もとが小さい胸だからな、膨張するにも限度があるというわけだ……。その苦しみから逃れたければ、ここで見ている皆に搾乳してもらおう以外にない」

紅音がギャラリー達に視線を向ける。

「へえ、それは面白そうだ。おっぱいを搾られてとんでもない痴態を晒すドリーミンが見れるわけだ」

ククツとブラックドリームも笑う。

「さあ、皆に懇願せい。私のおっぱいを搾って下さいとな。頼まなければ誰もやってはくれんぞ」

理性を奪われた紅音はどこまでも残酷だった。一片の慈悲すら見せてくれない。

（い、いや。そんなことできる筈がない。おっぱい搾ってなんて、頼める筈がないよ。でも、でも……く、苦しい。凄くおっぱいが苦しいんだよお！）

今にも胸が破裂してしまいそうに感じた。全身から変な汗が湧き出す。ヒクツヒクツと膨れ上がった胸が、時折痙攣する様に震えた。

「あ、あかつ……んあつ！ んっんんんっ！」

眦には涙まで浮かぶ。くぐもった声が口から漏れた。苦しみのあまり、パクパクと陸に打ち上げられた魚の様に口を開閉する。

そんなドリーミンに対し、紅音が憐憫の眼差しを向けてきた。

「辛いもう。苦しいもう。可哀相に……。なあ、何故そこまでして耐える？ そうまでして耐える意味などないではないか」

優しく彼女の手がこちらの頬を撫でてきた。

「耐えたところで苦しいだけ。下手をすれば死んでしまうのだぞ。いいか、死んだら何もかもが終わりだ。お主にはやるべきことがあるのだから？ であれば、選択すべきことはただ一つではないか。少し我慢するだけだ。それだけで——」

そこで紅音は一旦言葉を切り、膨れ上がった夢子の胸を強く揉んできた。その途端——。
じゅぎゅつ！ ぶしやああああつ！

「んひっ！ ひんんんんっ！ でっる！ おっぱ、おっぱいでっるうううっ!!」

全身を心地いい解放感が包み込む。ビクンツと乳首が一瞬上向きになり、白濁とした母乳を先端部から撃ち放った。我慢し続けてきた小便をやつと出した時の快楽を、更に数十倍に高めたかの様な刺激が走る。

「あつ！ あーあーあーあーあーつ！」

「な、なにをつ!!」

先端が触れたのは、蜜壺ではなく肛門だった。唐突に身体に覚えた異物感に、思わず二次元ファイターは驚きの声を上げる。

「何をではない。お主はミルク飲みに専念しておれ……。なあに、大丈夫だ。私はお主のマ○コを犯す気はないからな。無理矢理犯すのは私の意に反する。ただ、代わりに……、こちらの穴をいただくぞ」

無茶苦茶な言動だった。そのことに紅音自身が気付いていない。

「や、やめっ——そ、そこは……んおっ！ ひっ、ひおおおっ！」
ずじっ！ みぢっ、みぢみぢみぢいっ！

慌ててドリーミンは彼女の行動を止めようとしたが、挿入は容赦なく始まる。巨大すぎる肉棒が、夢子の排泄器官を拡張し、体内へと入り込んできた。

「くほっ！ こ、これは凄いぞっ！ おっおっおっ……私のペニスが締めつけられる。んおおっ、さ、最高じゃっ！ んおっんほおっ！」

「だっめっ！ ひっ！ んひいっ！ やぶ、やぶれっる！ わらひの、わらひのおながやぶけひやうっ!! むっり、無理なおっ お腹に、あ、穴が、あながあいひやうっ！」

腸壁が内側から拡張されていくのが分かる。排泄する為だけの器官を、醜悪なペニスが逆流していた。下腹部に熱気が広がる。本当に身体に穴を開けられているかのような感触だ

った。だというのに昂ったドリーミンの肉体は、その感覚すらも肉悦として感じてしまう。じゅぐぐつと肉棒が奥へ奥へと挿入されていくのに合わせて、ビュバアアツと膣口からは大量の愛液が噴き出した。

「あ、穴が空いちやうではないっ！ お、お主はしつかり飲まんか！」

背後から自分を犯す紅音の手が、頭に添えられた。そのまま無理矢理トレーに顔を押しつけられてしまう。ベチャリツと白濁液が頬に張りつき、鼻の穴を逆流してきた。

「んべっ！ んえっ！ げほっ！ げほおっ！ んひっ！ だめ、う、うごか、うえっうええええ……うごかないっでえっ！」

ばじゅんつばじゅんつばじゅんつ！

口を開くとミルクが流れ込んでくる。ドリーミンはトレーから顔を離そうともがいたが、紅音は頭を押さえつける力をまったく弱めてはくれなかった。それどころか、頭を押さえながら腰まで振ってくる。

腸奥に肉棒が叩きつけられるたび、ドリーミンの全身が肉悦が走った。カリ首が何度も肉壁を引っかける。

「とま、どまつで、どまつでくらはい。お、おひり、おひりがめくれひゃうんですうっ！」

巨棒が引き抜かれるたび尻肉が肉莖に引っ張られ、肛門が外側に捲れ上がった。ピンク色の媚肉が覗く。そんな状態で夢子は止まつてくれと訴え続けたが、紅音の耳には届かな

かった。それどころか悲鳴が上がるたび、紅音のピストン速度は上がっていく。

「おっおっおっおっおっ！　しまっる、締まってる。私のペニスがしぼられてっる！　ほおっ！　いひっ、尻穴最高っ！」

発情期を迎えた犬の様な動きだった。腰と腰がぶつかりあい、パンパンパンッと乾いた音が響き渡る。

「なんつで、なんでえっ？　お尻なのに、き、汚い穴をお、がされてるのにいっ！　なんつもの、こつれ、あつあつあつ、あーあーあーっ！　んじゅっ、じゅるるっ！　あづい、身体があづいのおっ！」

突かれるたびに全身が熱く火照っていく。必死に白濁液を飲みながら、少女は獣の様な嬌声を上げた。蜜壺は失禁でもしたかの様にびしょびしょに濡れている。溢れ出す愛液が太股を伝い、流れ落ちていった。

「が、我慢できねえっ！」

「こんなの見てるだけでいられるかよ！」

二人の可愛らしい少女が絡みあい、腰を振りあう。飛び散る二人の体液。密着する肉と肉。そんな光景に周囲の男達の我慢も限界の様だった。彼らもズボンを脱ぐ。幾本もの勃起した肉棒がドリーミン達に向けられた。

「よいぞ、主らもたっぷり楽しむがよい」

それを見て紅音が悦びの声を上げる。

「捜査官から許可が下りたぞ！ よし、たっぷり楽しもうぜ！」

男達は「うおおつ」と歓声を上げる。そのうちの一人が四つん這いになるドリーミンの下に潜り込んできた。そのまま肉先を膣口に擦りつけてくる。

ぐぶじゅう……。

「ひっ！ だ、だつめ、いまは、今はだ——」

密着する肉の感触に夢子の表情に恐怖の色が浮かぶ。だが、誰も彼女の言葉など聞いてくれない。それどころか恐れる少女の姿を悦び——。

ぶじゅうっ！ ぶじゅうぐるうっ！

「むひっ！ あ、あんんんんっ！ は、挿入^{はい}つて、挿入^{はい}つてくつる！ んあっ！ あっあつあああつ！！ だつめ、二本、二本はだむえええっ！」

容赦なく肉棒を蜜壺に突き込んできた。

肛門と膣——二つの穴を肉棒によって塞がれる。まるで肉棒によって身体を二つに潰されていくかの様にすら感じた。夢子の膣は痛々しい程に見開かれる。キュウツと背中が反り返り、トレーに密着させられていた顔が上がった。

「こつちもだよっ！」

ずごっ！ じゅごずうっ！

「おぼっ！ んぼっ！ んおええええっ!!」

その隙を突く様にペニスが口腔に突き込まれる。ちよつとした子供の腕くらいはありそうな巨棒が、少女の小さな口を限界まで拡張していく。

ずごっずごっずごっずごおっ！

「うぶえっ！ ふげっ！ うおええええっ！」

少女に対する気遣いなどどこにも存在しなかった。まるで膣を犯すかの様な勢いで、口腔に差し込まれた肉棒が前後する。肉茎によつて外側に捲れる唇。晒される顔はあまりに無様だ。

（く、くるっし、いっきが、できなっい。なのに、おっおっおっ！ の、どの奥、突かれるの、きも、ぢいっっ！）

喉奥を突かれると息が詰まる。あまりの苦しみに眦には涙が浮かんだ。だというのに、そんな陵辱に肉体は快楽を覚えてしまう。喉奥を亀頭で塞がれるたび、全身が官能に疼いた。

「お、俺は手だ！」

「俺は身体っ！」

「俺は髪だっつの！」

更に多くの肉棒がドリーミンを襲う。両手に握らされるペニス。掌に異常な熱気を感じた。全身にも擦りつけられる肉棒。短い髪が引っ張られ、無理矢理肉棒に絡まされる。身

体中がカウパー液でぐしょぐしょに濡らされた。

「んおっ！ わ、私にっもか！ んんんっ！ お、大きいぞ。おっおっ！ ひ、久しぶりのペニスは最高だ!!」

男達が襲うのはドリーミンだけではない。アナルを犯す紅音の膣にまで、肉棒を突き込み、欲望のままに腰を振る。

それはまさに肉の饗宴だった。

男女が絡みあいながらグジュグジュと淫らな音を響かせ、交わりあう。肌と肌が重なりあい、汗と汗が飛び散った。肉棒によつて無様なまでに少女達の蜜壺は押し開かれる。ビュッビュッビュッと愛液が何度も飛び散り続けた。

「あぶっ！ んおおおっ！ ひいっ、ひいのっ！ だめなのにいっ！ わらひ、だめにやのに、きもひいいのおっ！ にやんで、にやんでよおっ!! おごっ、おぼっ、ふぼおっ！」

ピストンを受けるたび、愉悦が増幅していく。分泌される汗には、いつしか甘みを含んだ発情臭が混ざり始めていた。膣奥を突かれるたび、何度も全身を痙攣させる。口腔に突き込まれた肉棒に、無意識のうちに舌を絡ませた。頬を窄め、ペニスを吸う。そのたびに男の口から「おお、最高」という歓喜の声が上がった。これを耳にすると、何故か嬉しくなってしまう。

「んじゅっ！ んじゅう。ふちゅう……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>